

鉄道大バザール

昭和五十二年十二月八日 第一刷発行
昭和五十三年二月二十日 第三刷発行

定価 一二〇〇円

著者 ポール・セル

訳者 阿川弘之

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―一二 郵便番号 一一二

電話東京(〇三)九四五―一一一 (大代表) 振替東京八一三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 藤澤製本株式会社

落丁・乱丁本はおとりかえします。

©Hiroyuki AGAWA 1977, Printed in Japan.

目次

1	ロンドン一五時三〇分発パリ行	9
2	直通オリエント急行	17
3	レイク・ヴァン急行	52
4	テヘラン急行	65
5	「ナイト・メール」号メシエッド行	74
6	カイバル峠の鈍行列車	82
7	「カイバル・メール」号ラホール行	90
8	「フロンティア・メール」号	101
9	シムラ行「カルカ・メール」号	110
10	「ラージダーニ急行」ボンベイ行	123

- 11 ジャイプル発「デリー・メール」号
- 12 急行「グラインド・トランク」号
- 13 ラメスワラム行各駅停車
- 14 「タライマンナル・メール」号
- 15 一六時二五分ガル発コロンボ行
- 16 「ハウラー・メール」号
- 17 マンダレー急行
- 18 各駅停車メイミョー行
- 19 「ラシオ・メール」号
- 20 ノンカイ発夜行急行
- 21 国際急行列車バタワース行
- 22 クアラ・ルンプール行「ゴールデン・アロー」号
- 23 シンガポール行夜行急行「ノース・スター」号
- 24 サイゴン発ビエン・ホア行

25 ユエ発ダナン行旅客列車

26 青森行特急「はつかり」

27 札幌行特急「おおぞら」

28 京都へ——超特急「ひかり」

29 「こだま」号大阪行

30 シベリア横断急行

1 ソ連船「ハバロフスク」号
314

2 「東方」^{ゴストク}号
320

3 「ロシア」号
329

あとがき 阿川弘之

354

314 308 299 290 279 264

口絵写真撮影・提供者 著者

装丁 杉浦範茂

鐵道大バザール

Title : THE GREAT RAILWAY BAZAAR

Author : Paul Theroux

Copyright ©1975 by Paul Theroux

Japanese translation rights arranged

with Hamish Hamilton Ltd., London

through Charles E. Tuttle Co., Inc., Tokyo.

「敗戦の軍隊のために、呪われた軍隊のために
悲しみに暮れる異国の同胞たちのために……」

R・キプリング「兵隊上がりの士官」(詩集『兵營のうた』(一八九二)より)

そして、わが兄弟姉妹たち、

ユージーン、アレクサンダー、アン・マリ、

メアリー、ジョゼフ、

ピーターに捧ぐ

メアリアンは、はるか遠くの列車の音を耳にしたところだった。彼女は熱心に見つめた。しばらくして列車の近づいて来るのが見えた。機関車の前部が黒々と次第に近づいて来、おそろしい力と速力で走って来た。目もくらむような速さで走りすぎると、目の光をうけた蒸気が、大きな一斉射撃のように橋に当って炸裂した。ミルヴェインとつれは、反対側のらんかんに駆けよった。だが既に列車は全部橋をくぐりぬけており、またたく間に急なカーヴをまわって見えなくなってしまった。線路の上に被さってのびている豊かに葉をつけた枝は、かき乱された空気の中で、前後にはげしく揺れていた。

「もしぼくが、もう十歳若かったら」ジャスパーは笑いながら、言った。「すてきだねえ、というところなんですがね。汽車はぼくの勇気を鼓舞してくれるのです。今すぐにも帰って行って、再び闘いの中に飛びこんで行きたい気持ちをはくに起こさせるのです」

——ジョージ・ギッシング『当世三文文士街』（主井 治訳）

ホヒーホーヒイヒイヒイキシヤがどこかできてきをならしてるきかんしゃってたいへんなちからもちねまるできょじんのようみずがからだじゅうをめぐりあらゆるほうがくへながれであいのなつかしいやさしいうたあああのおしまいのところのようあわれなひとたちつまやこからはなれてひとばんじゅうあぶられるみたいにあついきかんしゃのなかにいなくちゃならない

——ジエムズ・ジョイス『ユリシーズ』（丸谷才一他訳）

……ただしい思考のための第一条件はただしい感覚なのだし、ひとつの異国を理解するための第一条件はその匂いをかくことにある……

——T・S・エリオット『ラディヤード・キプリング』（永川玲二訳）

1 ロンドン一五時三〇分発パリ行

私の生れ故郷はアメリカのマサチューセッツ州で、子供のころ毎日、ボストン・メイン鉄道の汽車の音を聞きながら育った。そのせいか、大人になっても、列車の通る響きを耳にすると虫がおこる。つまり乗ってみたくなる。

私にとって、汽車の汽笛はなつかしの歌声である。大体鉄道なるもの自体に、バザールというか夜店の賑わいというか、何か人を惹きつける不思議な魅力があるらしい。地形などお構いなしにうねくねとなめらかに突き進む汽車。快適なスピード感で人の気分を一新してくれて、しかも決して卓上の酒がひっくり返ったりしない汽車。鉄道の旅ならたいいのことは安心していられる。

掌に汗握らされる飛行機や、ガソリンの臭いに吐き気を催す長距離バス、ないしは、自動車旅行のあの窮屈さと較べて、何という違いであろう。大きな気持のいい列車であれば、目的地がどこであるかすら問題ではあるまい。客車

の隅っこに一つ、席さえあったら、誰でも楽しい阿呆旅の仲間になれる。鉄道の導くまにまに行先へ着いてもよし着なくてもよし、——イタリア国鉄を退職後、無料パスがあるので汽車にばかり乗って暮らしていた倅せなイタリア男があるが、むやみと行先にたどり着くくらいなら、ずっと一等車に乗りつづけていたほうがましではないだろうか。イギリスの小説家マイクル・フレインがマクルーハンの言葉をもじって、「旅すなわち目的地」と言った通りだと思

う。今回、私の選んだ旅先はアジアであって、アジアは遠い地球の裏側かと思えば、私はただだともう嬉しかった。

やがて、そのアジアが窓の外にあらわれて来る。車窓を流れ過ぎる外界のバザール風景もさることながら、東へ東へと向かう何本もの急行列車の上で、私はきつと、賑やかな車内のバザール模様に驚きの目を見張ることになるだろう。

そもそも汽車の中ではどんなことでも起り得る。豪華な食事、酒宴、カードを手にと勝負やりませんかと入って来る人もいようし、密かなラブ・アフエアも始まるかも知れない。安らかに眠れる夜もあらうが、見知らぬ客がロシアの短篇小説に出て来そうな長い長い独り言を呟くの聞く夜もあらう。ロンドンのヴィクトリア・ステーションから東京駅まで、ありとあらゆる汽車ポッポに私は乗ってみるつもりであった。ヒマラヤ山麓シムラへの支線鉄道、カ

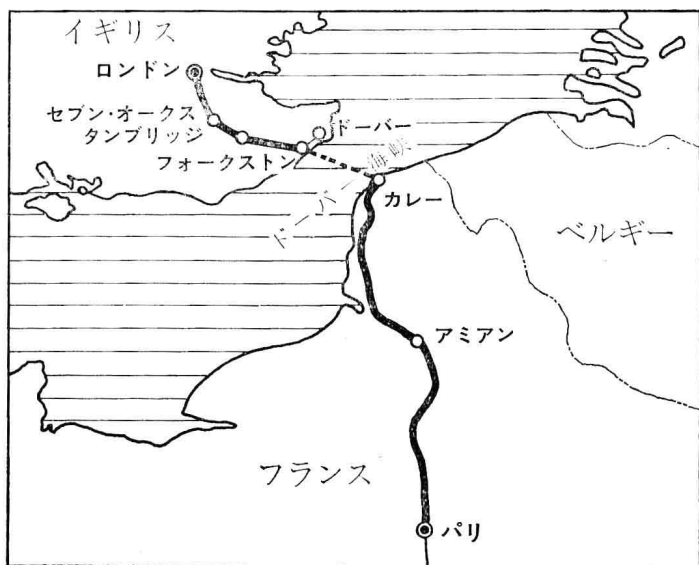
イバル峠越えの山岳列車、インド国鉄とセイロン国鉄との接続線、「マンダレー急行」、マレーシアの「ゴールデン・アロー」号、ヴェトナムのローカル列車。それにあの、「オリエント急行」とか「ノース・スター」とか「シベリア横断鉄道」とかいった魅惑的な名前を持つ列車群。汽車を捜し求めて、結局見つけ出すのは人間——汽車のお客さんたちということになるのだけれど。

☆

最初に見かけた相客はダフィ爾であった。私がこの男のことをよく憶えているのは、のちに彼の名前が——ダフィ爾という固有名詞が、私とモールズワースにとって、動詞になってしまったからである。ダフィ爾は、ヴィクトリア駅の七番ホーム、——国際列車出発ホームの行列の、ちょうど私のまんに並んでいた。年寄りの上に、服がひどくだぶだぶなので目立っていた。家を飛び出す時、あわててちがった服をひっかけて来たのかとも見えたし、もしかすると、たった今病院を退院したところかとも思えた。裾を踏んづけて歩くので、ズボンの折返しがボロボロになっている。紐でくるんだへんてこな茶色の紙包みを沢山持っている。勇躍長途の旅に出る旅行家というより、爆弾入りの手荷物を人眼にさらしている気のきかない爆破犯人といっ

た感じであった。線路から吹き上げる風にひらひらしている荷札を見ると、全部、R・ダフィ爾なる名前と行先のイスタンブール市スブレンディド・パレス・ホテルの名前が書いてある。イスタンブールまで御一緒らしい。もう少しましな相客が一緒ならいいのにと、私は思った。昔の国際列車にはよくヴェールで顔をかくした色っぽい未亡人が乗っていたりしたものだそうだ。未亡人の手さげカバンの中身がジンの瓶と遺産で一杯と来れば尚更結構、面白いことになるのだが、若後家さんの姿など見当らなかった。乗りこんだのは、ハイカーたち、ハロッズ百貨店のショッピング・バッグを提げて大陸ヨーロッパへ帰る観光客、セールスマン、こわそうな伯母さんか何かと一緒のフランス娘、白髪の英国人夫婦——このお二人は、もう齢だから車中小説の上でもたっぷり情事を楽しもうというつもりか、本を山ほど持っている。まあそんな人々で、ユーゴのリュエブリヤナより先へ行く客などいそうもない。ダフィ爾の行先はイスタンブールだが、——この男一体何しにイスタンブールへ行くのだろうか、私は考えた。私自身のことを言うなら、只今逐電するところである。何も仕事はないし、何処へ行くかなどということは世間様に一切伏せてある。私がちよっと悲しげに、黙って妻にキス一つして独り十五時三十分発のバリ行に乗り込んだとは、誰一人知らないはずであった。

1 ロンドン15時30分発パリ行



列車は今、ごうごうと音を立ててクラップムを通過している。旅とは、何かから逃げ出すと同時に何かを追いかけることだと、かねて考えていた。煉瓦作りのテラスの家、石炭置場、狭い裏庭といったロンドン南部の郊外風景をあとに、列車がダリッジ・カレッジの運動場（ネクタイをしめた生徒たちがものうげに運動していた）を通り過ぎる頃には、私はもう、列車の動きに融け込んで、午前中ずっと読んでいた新聞の見出しのこともいつか忘れてしまった。〈クリスティン嬢誘拐事件。女は近日中に起訴される見込〉とか〈九歳の娼婦救済計画〉——どこにも〈小説家蒸発〉というのは見当らなかったけど——。煉瓦住宅の列を過ぎ、トンネルに入り、ほんのちよつと車内が暗闇になり、そこを出たと思ったら、突然、目を見張るばかりの新しい光景が展けた。広々とした牧場、草を食べている牛、農夫が青い仕事着で干し草作りをしている。灰色の、しめっぽい穴ぐらのような大都会ロンドンから、列車は抜け出したのであった。セブン・オークスで、もうひとつトンネルがあり、さらに新しい田園風景が目に入ってきた。馬の遊ぶ野原、羊が寝ている、ホップ乾燥場の屋根に鴉、そして片方の窓に一群のブレハブ住宅が見え、他方の窓には十七世紀風の農家と沢山の牛が見えた。これがイギリスというもので、郊外風景と農村風景とがオーバークラップしている。田舎道に、長い自動車の列が出来て、踏切のあくのを

待っていた。列車の乗客たちは、

「いいキビだ、いつまでも止っておいで」とでも言いたげに眺めていた。

空はいつもの空である。タンブリッジ駅のフォームには、タンブリッジ・スクール（一五五三）の生徒だろう、紺のブレザー・コートの男の子たちが、クリケットのバットと通学カバンを持ち、靴下のずり落ちた恰好で、気取った笑みをうかべて立っていた。列車は彼らの鼻先すれすれに、気取った笑顔を掠め取るようにして駆け抜ける。大きな駅でも止まらない。私がカートン入りの薄い紅茶を飲みながら、食堂車からこういう光景をじっと眺めている時、向こうでは、私と同じように背を丸めたダフィ爾氏が、荷物から眼を離さずに、医者を使う庄舌器の先で茶をかき回していた。ホップの畑を過ぎる。ケント州の九月は、ホップの花と蔓草とで地中海沿岸の様相を呈している。ジブシーのキャンブを過ぎる。おんボロの箱馬車が十四台駐っていて、それぞれの出入口の外に、ゴミ屑の山がどっさり積み上げてある。一軒の農家が見えたとすると、すぐに住宅団地があらわれる。奇妙な衣類がたくさん洗濯紐に干し並べてある。ゴルフズボン、ロング・ジョンズと称する長袖の肌着、黒いブラジャー、子供の帽子と靴下の行列、すべてが、難破船団の信号旗みたいに、各家々の暮しぶりをメッセージにして伝えているようであった。

ノン・ストップのため、この急行列車は、火急の目的でもあるかの如きムードになって、海岸へ、ドーバーの渡しへと突っ走っているけれども、そんなものは実は仮の姿に過ぎない。誰もそれほど急いではいはしないのである。ダフィ爾が、揺れるテーブルで二杯目の紅茶を注文した。アッシュフォードの黒っぽい操車場がぼんやり見えて忽ち過ぎ去り、ロムニー・マーシュの草の丘を越えて、列車はようやくフォークストンへ近づいた。その頃には、私も他の乗客たちも、すでにイギリスを離れたような気分になって来た。自分の車室へ帰ってみると、イタリア人たちが、声高にイタリア語で話している。どうやら、英国を分離れる一歩前まで来たと思うと、気が楽になるらしかった。今まで、ただ丸坊主の頭にかぶりものを載せた四人組（二人がフェルトのホンブルク帽、一人がターバン、一人がビーハイプ型のかつら）がいるなと思って眺めていたナイジェリア人たちも、ヨールバ族の言葉になって、一音節終るたびに舌打ちするようなしやべり方で活発にしゃべり出した。英語で何か言うのを止めて、一人々々の乗客が母国語へ戻っていく。

「見てごらんなさいよ」

一人の女が膝にハンカチを広げながら言った。

「整然としたもんだねえ」

窓際の男が答えた。

「新しいお花が供えてあるわ」

女はハンカチで片方ずつ鼻をかむ。

「戦歿者墓地協会が管理しているんだよ」

「こんなにきれいに、よくやるわね」

紐で結わえた紙包みをいくつも持った小さな人影が、通路側の窓にごつんごつん肘をぶつけながら廊下を歩いて来る。ダフィルであった。

ナイジェリアの女が、窓よりかかつて、終着駅の駅名を「フォッキーストゥーン」と読み上げた。その発音ちがいが、如何にもこの港町を馬鹿にしているように聞えた。

実際彼女はトロロプ（通信官更だった十九世紀のイギリス作家）の小説に出てくるグレンコーラ夫人と同じくらい興ざめだったのかも知れない。レディ・グレンコーラにとって、フォークストンはどうして面白くないところも少なかった。

霧雨まじりの突風が、鉛色した港の海面を泡立たせながら顔にまともに吹きつけて来る。九月、最初の寒波がロンドンを襲った時風邪を引いて、それが未だ残っているから、私は思わず眼をそばめたが、心の中には、セイロンの椰子の木々や、燃えるような熱気が浮かんでいた。とにかく、風邪のおかげで、旅立ちがしやすくなったのは事実である。旅が即ち病氣治療になるとはありがたい話であった。

「アスピリンを飲んだかい？」「いや、アスピリンなんか

より、インドへ行つて来ようと思うんだ」——私は鞆を連絡船へ運びこみ、船内のバーに入った。年配の男が二人いた。ひとり、バーテンの注意を惹こうと、フロリン銀貨でカウンターをコツコツ叩いている。

「レジーのやつ、おそろしく小さくなっちゃったなあ」その男が言うと、

「そうかねえ」もう一人が答える。

「どうもそうだよ。おそろしく小さくなって……、自分の服の身丈が合わないんだもの」

「しかし、もともと大男じゃなかっただろ」

「そりゃそうだけど、君、やつに会ってみたいかい？」

「いや。病氣だということ、ゴッドフリーに聞いてたからね」

「かなり重態だったんだよ」

「そうか。寄る年波でかわいそうになあ」

「とにかく、あいつ、ひどく小さくなっちゃった」

そこへダフィルがやって来た。ひょっとすると、二人はこの男のことを話題にしているのかと思つたが、そうではなかった。年配の紳士たちはダフィルを無視した。ダフィルは、荷物をどこかへ忘れて来た男のような、あるいは人に後をつけねらわれている男のような、落ち着かない様子であった。だぶだぶの服のせい、妙に弱々しげに見える。両肩からだらんと垂れたねずみ色のギャバジンの上着

はくしやくしやだし、袖は長過ぎて指の先まであるし、ズボンの裾は曳きずつてゐる。何だか、この爺さん、パンのへたみたいな匂いがある。船内でもツイードの帽子を被ったままで、私同様風邪をひいているらしかった。靴がまた、田舎者の履く頑丈でけったいなダタ靴である。パーテンにアップル・サイダーくれと言っているのが聞えたが、どこの訛りか私には分らなかった。しかし、なりふりから察するに、地方の人間にはちがひあるまい。何しろ服装が、ロンドンっ子にしては勤儉貯蓄のお徳用型であった。その帽子や上着を、いつ、どこで、いくらで買ったか、そのダタ靴は何年何ヵ月はいているか、全部律義に覚えていそうな感じである。しばらくして、私がラウンジの隅を通り抜けると、ダフィルは包みをひとつ開いて、ナイフ一本、長いフランスパン、チューブ入りの辛子、赤いサラミの輪切りなど、自分の前に並べ立て、何か考え込みながら、サンドイッチを作つてゆっくりかじつてゐるところであつた。

海峡を渡り了えると、カレーの駅はすでに暗かつた。パリ行の急行列車だけが、照明灯の光に照らし出されてゐる。それを見たら、不思議な安らぎを覚えた。例のグレンコーラ夫人が友達に言うせりふ通り、「ねえ、アリス。わたくしたち、もう二度とあんな連絡船に乗らなくてもクルド人の国まで行けるのよ。わたくし思うに、それが大陸ヨー

ロッパのありがたいとこね」なのである。さて、これからいよいよパリ。オリエント急行、そしてクルド人の住むトルコへ、イランへ。私は列車に乗り込んだが、指定のコンパートメントが人いきれするほど満員なので、一杯飲み食堂車へ行くことにした。ボーイの案内してくれたテーブルでは、男と女がロールパンを食べもせず、むやみとむしつてゐた。私はワインを注文しようと思うのだが、盆を持つて急ぎ足に行ったり来たりしているボーイたちは、「ちょっと」と眼顔で呼びとめるのを無視する。そのうち急行が発車した。私がしばし窓外を眺めていて、ふとテーブルに眼を戻すと、いつの間にか焦げくさい魚料理がひと皿置いてあつた。パンをむしつてゐた夫婦が、ワイン係のウェイターに頼まなきや駄目ですと教えてくれた。ワイン係なるものを捜しているうちに二た皿目が来る。それでもどうにか係を見つけて、葡萄酒を注文することが出来た。「アンガスが、『タイムズ』に、自分は小説を書く前必ず取材をすると書いてたが」と亭主の方が言っている。「どういうつもりか、わたしにはよく分らん」

「そりや、アンガスは取材しないと書けないからじゃないの」

「アンガス・ウィルソンのことですか？」と、私は口を出した。

二人が私を見た。細君の方は微笑しているが、亭主は、

幾分うさんくさそうな眼つきである。

「グレアム・グリーンなら、取材なんか必要とせんでしょうね」と、作家が皆友だちのような口ぶりなので、

「なぜですか？」私は突っかった。男は溜息をついた。

「あの人は何でも知ってるもの」

「それはそうかも知れませんが」私は言った。「アングス・ウィルソンの『魔法のように』を読んで、私は、本ものの農学者が描いてあるという気がしましたね。一方、グリーンの『名譽領事』を読むと、三十歳の医者がまるで七十の小説家みたいな口のきき方をしてるでしょ。よく出来た小説だとは思いますが……。もっとちゃんと読んでみられるといいですよ。——ところでワインを如何ですか？」

「いいえ結構」細君がむっとして答えた。

「グレアムは、一冊おしに送って来てくれたよなあ」男が言った。細君に話しかけているのだ。「愛情を籠めて、グレアムより」、扉にそう書いてくれてた。あれ、わしの鞆に入れてなかったか」

「あの人は、ほんとに素敵な人」女が言った。「グレアムに会うの、いつも楽しんだわ」

あとは双方白けて黙りこんでしまった。食堂車が揺れて、薬味入れとソース壺をガタガタいわせる。デザートとコーヒーが出て来る。私はワインの小瓶を空けて、もう一本欲しいところだったが、ボーイたちは再び忙しくなり、

盆を持ってよろめきながら、テーブルの間をよごれた皿を集めて回っていた。

「汽車っていいものね」女が気を変えるように言った。

「このすぐ前の車輛は、オリエント急行に併結されること、御存じですか？」

「ええ。実はその——」

私が言いかけた時、

「ひどいな、こりゃ」

男はウェイターが渡した鉛筆書きの小さな紙片を見、金を受け皿にのせると、それきり私の方には眼もくれず、細君を引き立てて出て行った。

私の分の食事代は、しめて四十五フラン、およそ十ドル見当である。いささか呆れて、あとで私はちょっとした腹いせをしてやった。自分のコンパートメントへ戻ってから、食堂車のテーブルに新聞を置き忘れて来たのに気づき、引き返したのだが、新聞を取り上げようとすると、ボーイが、

「どうなさるんですか？」とフランス語で言う。

「どうなさるって、俺の新聞だ」私はつつけんどんに答えた。

「そこはあなたのお席でしたか？」

「むろんそうだよ」

「それでは、何を召し上がったか仰有って下さい」